
浮気者！？

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮気者！？

【Nコード】

N4004E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

喫茶店で女友達同士の浮気を叱る話だと思って聞いているとこれが。案外こういうのも浮気かも知れません。

第一章

浮気者！？

喫茶店で紅茶を飲んでいると近くの席から話し声が聞こえてきた。
「だからあんた」

呆れたような若い女の声だった。

「彼氏いるでしょ」

「それはいるけれど」

最初話を聞いて何かと思った。そちらは振り向かなかったがそれでも話は聞いた。盗み聞きの間になるがこれは不可抗力だと自分に言い聞かせて話を聞く。

「仕方ないじゃない」

「仕方ないとかそういう問題じゃないでしょ」

また呆れた声が聞こえてきた。今度は怒りも入っていた。

「浮気よ、浮気」

「それは」

「この浮気者」

叱っていた。随分と口調がきつい。喫茶店にいと色々とおしゃべりを聞くことがあるがそれでも実際にこんな話を聞いたのはじめてだった。それで興味深く話を聞いた。

「そんないい加減なのでどうするのよ」

「そうするのって言われても」

叱られている方も何か開き直ってきた。よくある展開だろうか、と心の中で思ったけれどそれは僕の中に留めてさらに話を聞き続けた。

「好きになつたから」

「あのね、あんた」

また声が怒ってきた。

「これで何回目よ」

（おやおや）

何度目という言葉を聞いた僕は心の中で肩をすくめさせた。そう来たかと思つて。

（こりゃ本当に浮気者かもな）

それでも黙つて話を聞く。心の中ではほくそ笑んでいても話は續いていた。説教になつていた。

「何度も何度も浮気して。それで相手はすぐ変えて」

「好きになつたら仕方ないでしょ」

「そういう問題じゃないわよ」

確かにそういう問題じゃない。好きになつたら誰でもいい、というのはまあよくある歌詞だがこれを実際にやるとんでもないことになる。本当にやって破滅して家庭裁判所なり弁護士なりのお世話になつたという話もままある。この辺りがどうもドラマとは違ふということか。

「とつかえひつかえで」

また過激だと思つた。

「しかも相手のタイプもバラバラで。一体何なのよ」

「けれど彼氏はずっと同じよ」

悪いがそれは言い訳になつてない。浮気をしていれば。

「だからそれは別に」

「彼氏は一緒でも浮気をしていれば同じよ」

当然ながら説教はこうだつた。

「同じなの。わかる？」

「わからないわよ」

「この馬鹿っ」

遂に言葉は突き放した感じになつた。

「わからないって何なのよ」

「だから。好きになつたのよ」

話が聞いていても堂々巡りになつたのがわかつた。

「そんなこと言われても」

「で。今度はどうするの？」

一方の声が冷静になったようだった。

「それで」

「まだわからないわ」

恋は盲目というが。これまた随分無責任な言葉に聞こえた。

「どうなるかさえも」

「そう。まあいつものことだしね」

怒っていたのが一転して静かになってきた。完全に呆れたのだろ
うか。

「あんたのことは」

「御免なさい」

「私に謝る必要はないのよ」

これは僕も同感だった。聞いていて思った。今自分のことに気付
いたが紅茶を飲む手が止まっていた。話を盗み聞きするのに夢中
になってしまっていた。

「ただ。彼は傷つけないでね」

「わかったわ」

これで話は終わりかと思ったら。何か違った。今度は急に明るい
調子で話を変えてきた。この店のクレープに関する話になったのだ
った。

「それでここのクレープだけね」

「ええ」

浮気で怒った後だとは思えない位に話が弾んでいる。思わず同じ
人間同士が話をしているのかと見てみたくなったがそれは止めた。
止めてじっと聞き続けることにした。

「どう思うかしら」

「いい感じね。甘くて」

それを聞いていて僕もクレープを食べたくなった。正直に言って。

「しかも上品でね」

「クレープだけじゃないわね」

（何と）

今の言葉を聞いて心が動いた。クレープだけじゃないとすると。

「生クリームもいいし」

「果物もいいの使ってるわよね」

さらに心が動いた。聞いているだけで誘惑の蜘蛛の糸に誘われるようだった。

「チョコレートもいいし」

「そうそう」

「そうか」

僕は今度は実際に声を出してしまった。ここまで聞いてはいてもたってもいられなくなった。食欲は他のどんな欲望よりも強い。

第二章

「そんなに美味しいのか。それなら」

「何頼む？」

ここでまた後ろから声が聞こえてきた。

「そうね。バナナチヨコクレープがいいわね」

「じゃあ私は苺クリームにするわ」

「バナナチヨコに苺クリームか」

僕はその二つを耳にした。耳にすると自然と心がそちらに向かう。言葉と食べ物の持つ魔力だった。

「じゃあどちらかにするか」

どっちにするかまではまだ決めていなかった。けれどウエイトレスさんと呼ぶことにした。何か吉川ひなのをもっと明るくして利発にした感じの背の高い女の子だった。胸の名札が目に入ったけれどそこには高添とあった。何か名前と同じでやけに背が高いのだなと思った。その他数さんに注文するのだった。

「はい。御呼びですか？」

「クレープ下さい」

その高添さんに言った。

「ええと」

「ええと？」

「バナナチヨコを」

とりあえずそれにした。心の中でやっぱり苺クリームの方がよかったかとも考えたけれどとりあえずそれにした。賽は投げられた、そんな気持ちで頼んだ。

「わかりました。それじゃあ」

「御願います」

こうしてバナナチヨコクレープを頼んだ。何かクレープを頼むのに随分と逡巡した。その逡巡の間に向こうではまだ話が続いていた。

「何処に行くの？今度は」

「そうね。いつものお店ね」

「この浮気者」

その浮気者は何処かの店員かと思った。話を聞いていて。

「入り浸ったら駄目よ」

「けれど今はあそこにしかないから」

（ない！？）

今の言葉は僕の聞き間違いかと思った。そうでなければ向こうの言い間違いか。

（一体何なんだ）

「だからあそこに行くしかないのよ」

「わかったわ。じゃあ付き合ってあげるわよ」

「有り難う」

「目付けよ」

釘が刺された。

「断っておくけれど」

「厳しいわね」

「こう続けて浮気されたら呆れるのも通り越して顎が外れるわ」
また凄い表現だった。

「だからなのよ」

「そうなの」

「そうよ。わかったら行くわよ」

随分と物凄いやり取りだった。今の間だけでも。

「これ食べたらね」

「わかったわ」

何か随分と物凄いやり取りだった。僕はそれを聞きながら目の前に置かれたクレープを食べた。そのクレープは確かに美味かった。その美味いクレープを食べてから店を出た。席を立つ時にふと話していた方を見ると随分と奇麗な人が二人いた。歳は僕より三つ位上で顔はどちらもよかった。そのうちの垂れ目の人が苺クリームを、

茶髪の人がチョコバナナを食べていた。それを見て僕はその浮気者は茶髪の人かしらと思った。理由は簡単でぱっと見た外見でだ。派手そうだったからだ。

「遊んでいる感じだよな、確かに」

そんなことを思いながら僕は店を出た。けれどそれについてはすぐに考えるのを止めてクレープのことに考えを移した。今度は苺クリームを食べようと。そう考えていた。

それでまた来た。今度は苺クリームを頼むと決めていた。またあの高添さんが来て注文を窺ってきた。まずクレープは決まっていた。飲むのもだ。

「苺クリームのクレープとロシアンティーを」

「そのセットですね」

「はい、御願います」

その言葉に応えた。これで決まりだった。

暫くしてそのロシアンティーとクレープが来た。早速クレープを食べようと銀色のフォークとナイフを手を取ったその時だ。たまたま空いていた右隣の席に。不意に二人やって来た。

「おや」

僕はその二人を見て小声をあげてしまった。あの時の二人だった。

「また来たんだ」

「何頼むの？」

「決まってるじゃない」

二人は向かい合って座るとまずこう言い合った。

「クレープよ。それと紅茶」

「そうよね。やっぱりそれよね」

あの垂れ目の女の人が茶髪の女の人の言葉に頷いていた。この人達も頼むのは同じだった。もっとも僕はこの人達の話盗み聞きして決めたことだけれど。

第三章

二人は少しメニューを見合っていた。ウェイトレスの人を呼んだ。今度来た人は高添さんじゃなかった。それとは別の小柄な泉さんという人だった。

「チョコバナナと苺クリームですね」

「はい」

二人はその泉さんというウェイトレスさんに応えていた。

「それを御願います」

「飲み物はウインナーティーが二つ」

「それです」

「それで御願います」

ただ紅茶は僕とは違っていた。ウインナーティーだった。僕はウインナーコーヒーは機嫌がいい時に飲むけれどウインナーティーは飲んだことがない。だから今度はそれを飲んでみようかしらとまた二人の話を聞いていて思うのだった。

何はともあれ二人のところにクレープと紅茶が来た。また同じ組み合わせと見ていたら違っていた。今度は茶髪の人が苺クリームで垂れ目の人がチョコバナナだった。前とは逆だった。

「あのね」

茶髪の人の方から垂れ目の人に対して言ってきた。僕はクレープを食べながら何気なくを装って話を聞いている。あくまで食べているだけなのを装って。

「また相手乗り換えるなんて何なのよ」

（おや）

僕は今の言葉を聞いて意外に思った。浮気をしているのはこの人じゃなかった。そのことがまず意外だった。僕の予想が外れてしまった。

「全く。またまた浮気なんて」

「仕方ないじゃない、夏実」

けれど垂れ目の人は無然とした顔で茶髪の人に言い返すのだった。茶髪の人の名前を読んで。とりあえず僕にも茶髪の人の名前がわかった。夏実さんというのが。顔をちらりと横目で確かめたが何となくその名前と合っている外見だった。それを心の中で思った。

「だって。彼死んだんだし」

「まあね」

何か話がさらに尋常じゃないものになっていた。僕はそれを聞いて思わずフォークとナイフの手を止めた。そのうえでまた話を聞くのだった。すぐにまた手を動かして。

「それはそうだけれど里香」

垂れ目の人の名前もわかった。里香さん、合っているというか自然に名前と顔と一緒に頭の中にインプットされた。

「それですぐに乗り換えることはないでしょ」

「だって彼凛々しいし」

どうやら今度の浮気相手は端整な美形らしい。話を聞いてこう思った。

「一途だしそこがいいのよ」

（浮気する奴が一途か）

それには何か違和感を感じた。そんなことがあるのかと。

（それはどうかな）

「けれどあれじゃない」

夏実さんが不機嫌そのものの顔で里香さんに抗議してきた。

「別にいいじゃない」

（いいじゃない筈がないだろう）

何か少し頭にきた。話を聞いていて。

（浮気なんかしたら。それも相手をとっかえひっかえは）

「相手は。リアルじゃないんだし」

（んっ！？）

今のリアルじゃないという言葉にまたフォークとナイフを止めた。

そのせいでどうも食べるのがいつもより遅い。いつもならもう食べ終わっているというのにだ。

（何かおかしいぞ）

そう思ったその時だった。

「あんた。あのアニメ好きね」

「大好きよ」

（アニメ！？）

最初聞いた時は訳がわからなかった。

（何でここでアニメが）

こう思っていたら。里香さんはまた言っただった。

「原作もいいしね」

「原作ってどっちよ」

「小説の方よ」

（今度は小説）

話がわからない。話を聞いていて首を捻る。

（一体何の話なんだ）

「漫画も好きだけれどね」

「漫画の方もいいのね」

「ええ、大好き」

笑顔で言っているのが聞こえた。

「どちらも好きなのよ。作品自体も」

「それでキャラもなのね」

「そうよ。もう夢中なのよ」

（ああ、そういうことか）

ここまで話を聞いてやっとわかった。話はバーチャルリアリティ、格好よく言えばこうなる。簡単に言えば二次元の話だ。そっちの方の話だった。

第四章

「あれってキャラが凄い立ってるじゃない」

「まあね」

夏実さんもそれは認めていた。

「キャラを書くのは確かに上手いわよね」

「漫画の方もアニメの方も」

「あんたゲーム持っていたわよね」

「勿論よ」

ゲームまで出ている。どうやらかなり有名な作品らしい。それを聞いてこう思った。自分有名ならしい。だとすればどれなのか。ちょっと頭の中で探してみた。

けれどその探索は打ち切った。また里香さんが言ったのだ。

「あの前好きだったキャラの最期なんか」

「凄い最期だったわよね」

「本当に泣いたわよ」

この前の話のキャラらしい。横から聞いて思った。

「もう悲しくて。本当にね」

「私も悲しかったけれどね」

どうやら夏実さんもその作品のファンらしい。話を聞いていてわかった。

「けれどあんた泣き過ぎだったわよ」

「だって。本当に悲しかったから」

里香さんはこう主張した。

「仕方ないじゃない」

「それで。またすぐにあの子に乗り換えたの？」

「前から好きだったのよ」

そう主張していた。

「彼が死んだから一番になったのよ」

「彼の敵陣営なのに」

「それでも。好きだから仕方ないじゃない」
「そういうことだった。」

「それは」

「まあ。そうね」

夏実さんも遂に折れた感じになった。

「確かにあの子可愛いし」

「けれどね」

里香さんが不意に強い言葉になった。ちらりと横目で見たら表情もそうなっていた。

「彼のことは絶対忘れないわ」

「忘れないのね」

「グズ。ずっと取っておくわ」

また随分一途だと思った。これに関しては。

「これまで好きになったキャラと同じようにね」

「同じなのね」

「そう、同じ」

そして夏実さんの言葉に頷いていた。

「同じだから」

「好きにすればいいわ。何人好きになってもそこまで貰けるのならね」

「わかってくれて嬉しいわ」

「いえ、わからないわ」

話を聞いていて今の夏実さんの言葉には思わずずっとこけそうになった。流石に今飲んでるものを吹き出しはしなかったけれどそれでもそうなりそうだった。

「私はいつも一人だから」

「ヒロインのあの娘？」

「そう、あの娘」

話を聞いていてレズかと思った。半分本気で。

「あの娘が一番可愛いじゃない、女の子の中じゃ」

「そうね。けれどあんたも変わってるわね」

「何が？」

夏実さんの返事は自覚していない人の返事だった。実は僕も心の中では今の里香さんの言葉と同じことを思った。

「何がって。リアルじゃノーマルなのに」

「ええ」

それを聞いてほっとした。そういうことならと。

「あっちの世界じゃ女の子専門なのね」

「彼氏はリアルで一人でいいのよ」

それが夏実さんの考えらしい。

「だからよ」

「そういうこと。それはあんたもでしょ」

「まあ。リアルはね」

今の言葉を聞いて里香さんへの見方が少し変わった。どうやらそっちの方ではまともな意味で一途らしいとわかったからだ。思えば変な言葉だけだ。

「そうよ。あっちの世界は違うけれど」

「彼氏は一人」

夏実さんはあらためて言うのだった。あえて強調して。

「それはちゃんとしないとね」

「そういうことね。それじゃあ」

ここで話が終わったようだった。

「行きましょう、キャラグッズ買いにね」

「ええ」

笑顔で立ち上がってそのまま席を後にするのを横目で見た。横目で見るともうクレープも紅茶も食べ終えていた。実に早いと思った。僕の方はまだだった。

「何だかんだ言っても」

僕は御二人をの後姿を見ながら一人呟いた。

「意外と皆一途なんだな」

恋にかけては。浮気でもそこには何かのルールがあつたりするものだとも思いながら呟いた。とりあえずまだ残っているクレープを食べながら。

浮気者！？

完

2008・4・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004e/>

浮気者！？

2010年10月8日15時16分発行